

2012 年度研究旅行報告書
宗教音楽における「礼拝価値」から「展示価値」への変遷について
—パリのゴシック教会建築とパイプオルガンの調査を通して—
国際文化学部 高木 真優

<目的>

フランス・パリをフィールドに、教会音楽の起源とも言える数々の教会堂に設置されたパイプオルガンを巡り、キリスト教と音楽の結びつきや、パイプオルガンの持つ歴史や宗教性について調査することで、ゼミで扱っているベンヤミン『複製技術時代の芸術作品』の「礼拝価値」や「展示価値」について再考する。

<調査報告>

○サン・ジェルマン・デ・プレ教会【Église St-Germain des Prés】

この教会はパリ6区にあり、パリ最古の鐘楼を持つ初期ロマネスク様式の教会である。この教会に入った時に私が感じたことは、時代を越えた非常に神秘的な空気が流れているということだ。日本の教会とは比べることができないほど天井が高く広いのであるが、小さな音でも非常によく響いていた。訪ねた時間にパイプオルガンの音を聴くことはできなかったが、人々の話し声や足音といった音の響きを体中で感じる事が出来た。修道院の付属教会ということもあり、ステンドグラス等は豪華でないが、その質素さの中に真の美しさが漂っているように感じた。



教会外観

○サン・シュルピス教会【Église St-Sulpice】

6世紀の大司教聖シュルピスに捧げられた教会。現在の建物は16世紀にルイ13世の妃アンヌ・ドートリッシュの命で作られた。6人の建築家と100年以上の歳月を費やし、パリ屈指の規模を誇る古典様式の教会が落成したが、実は正面向かって右の塔は未完成である。

ここには、世界有数の規模のパイプオルガンが設置されてある。私がこの教会を訪ねたときはミサの時間ではなかったが、かすかに、オルガンの音を聴くことができた。小さな音であったのにもかかわらず、音が教会の空気に溶け込んでおり、美しい音色であった。オルガンの装飾ケースもただならぬ雰囲気醸し出しており、いつまでも眺めていられる

気分だった。

このシンフォニックオルガンを製作したのはカヴァイエ・コルという人物である。カヴァイエ・コルは19世紀のロマンティックオルガンの偉大な製作家の一人であり、そのような人が作ったオルガンを直接見ることができ、本当に良かった。

小説「ダ・ヴィンチ・コード」の作中に重要な場所として登場したこともあってか、観光客の姿が目立っていたように感じた。



教会外観



パイプオルガン



教会内部

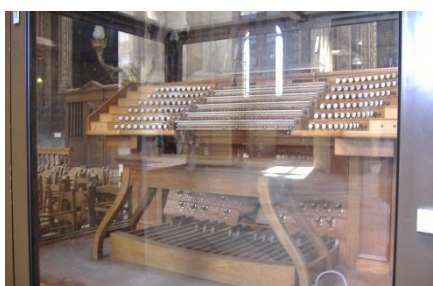
○サン・トウスタッシュ教会【Église St-Eustache】

パリではノートルダム大聖堂に次ぐ大きさの教会。モリエール、宰相リシュリュー、ポンパドゥール公爵夫人ら、各界著名人が洗礼を受けた教会としても知られている。骨組みはゴシック様式、装飾はルネサンス様式で、100年がかりで建築され、1637年に完成した。私が訪ねたときは、一部工事中であった。

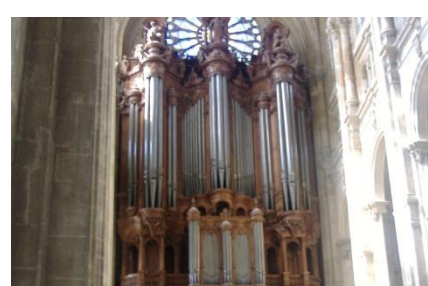
7000本以上ものパイプが並ぶオルガンが非常に見事であった。直接音を聴くことはできなかったが、教会内にオルガンの構造がガラスケースに展示されており、視覚の面からオルガンについての知識を得ることができた。



教会外観



オルガンの構造



パイプオルガン

○ノートルダム大聖堂【Cathédrale Notre-Dame de Paris】

大聖堂を訪ねてまず驚いたことは、巨大な建築空間に加えて、入口の周辺や外壁の彫刻や美しいステンドグラスなど、おびただしい数のモチーフが存在しているということだ。教会堂というよりは、美術館を訪ねたような感覚になった。

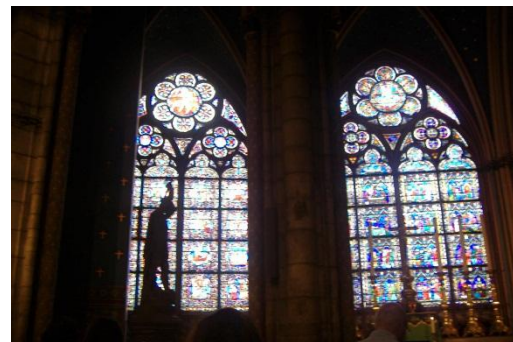
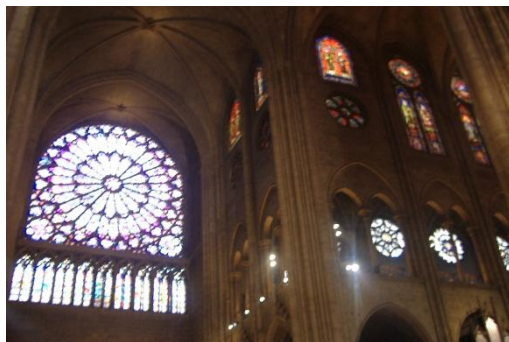


私が訪ねたときは、ちょうど日曜日の12時のミサの時間であった。観光地としても有名なこの場所には、7000本以上のパイプを使った、5段鍵盤の豪華なパイプオルガンが設置されている。荘厳な儀式の中で流れるパイプオルガンの音は、透明感に溢れつつも、一つ一つの音にしっかりとした重みがあり、美しい音色を放っていた。ミサ中に流れる音楽を生で聴くのは初めてであり、非常に感動した。ミサという神聖な時間に参加することができたことは、今回の調査において最も印象に残っていると同時に、非常に良い経験になったと思う。

パイプオルガンの音だけでなく、豪華なステンドグラスも非常に魅力的であった。色とりどりの光が床に反射し、幻想的であった。

この神聖な空間は、オルガン音楽とステンドグラスの光の融合によって構成されているとともに、お互いに効果を高め合っているのだと感じた。

この神聖な空間は、オルガン音楽とステンドグラスの光の融合によって構成されているとともに、お互いに効果を高め合っているのだと感じた。



内部のステンドグラス

○サン・ジェルヴェ、サン・プロテ教会【St-Gervais , St-Prtais】

教会堂本体はゴシック様式であり、ファザードのみがドウ・ブロス設計のルネサンス様式である。ローマの暴君ネロの圧政で殉死したジェルヴェとプロテ兄弟に捧げられた教会で、1657年に完成した。訪問時は、天候があまり良くなかったのであるが、ステンドグラスからの光が非常に美しかった。

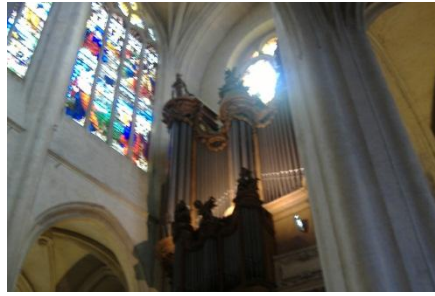
ここには、1601年製のパリ最古のパイプオルガンがある。

パイプオルガンだけでなく、クープランのオルガンも存在する。資料だけでは見られない細部までじっくりと見学することができ、今回のテーマにおける思慮が深まったように思われる。

この教会においては、観光客の姿はほとんどおらず、来ている人は皆礼拝が目的のようであった。そのため、訪問した教会の中で最も人が少なかった。教会が「礼拝」のための場所であることを強く感じると同時に、教会の本来の姿を再確認することができた。



教会外観



パイプオルガン



クープランのオルガン

<考察（ベンヤミンのいう「礼拝価値」と「展示価値」について）>

私は、今回の旅行において教会音楽の根源とも言える数々の教会を巡った。そこで感じたことは、宗教音楽における「礼拝価値」から「展示価値」の混在についてである。

それが最も顕著に表れていたのは「ミサ」と「コンサート」であった。

教会を訪ねると、オルガンコンサート開催を知らせるポスターをよく目にした。曲目を見ると、やはり宗教曲が多かったように思われる。

しかし、同じ宗教音楽であったとしても、「ミサ」と「コンサート」における音楽の在り方は全く異なっていると言えるだろう。

ミサは、神を賛美し、罪のあがないを願い、恵みを祈るカトリック教会で行われる祭儀の中で最も重要な祭儀である。その中で歌われるミサ曲をはじめとする宗教音楽は「礼拝」を基点とした「礼拝価値」の高い音楽である。オルガン奏者だけでなく、祭祀・信者もが演奏者の一部なのであり、その聴き手はキリストである。また、オルガンの演奏は、あくまでも「伴奏」的役割を担っている。

一方、コンサートにおいて演奏される宗教音楽においては、まず目的から大きく異なっている。コンサートにおいて演奏するとき、「礼拝」を目的にはしていない。オルガンの音色を多くの人に聴いてもらうこと、芸術的に評価してもらうことが目的となっている。演奏者はオルガン奏者のみであって、その他大勢は皆聴き手である。オルガンの演奏がメインであるコンサートにおける演奏は、「展示価値」の高い音楽であると言えるだろう。

そして、実際に調査する中で気付いたのは、宗教音楽だけでなく、“教会を訪ねる人々”においても、「礼拝価値」と「展示価値」の混在・変遷が見られるということだ。

教会を訪ねると、様々な人々の様子がうかがえる。ミサに参加することを目的とする「礼拝価値」を求める人もいれば、観光を目的とするような「展示価値」を求める人もいる。

では、なぜ教会という本来「礼拝価値」の高い場所の中で、「展示価値」と「礼拝価値」の混在が見られるのであろうか。

そこにはやはり今回の大きなテーマである「複製技術」が深く関与しているように思われ

る。

宗教音楽という面だけに注目したとき、私たちは現在、宗教音楽やパイプオルガンの音色を教会に行かずともCDをはじめとするデジタル複製技術を介することで、どこでも簡単に聴くことができる。現に、ノートルダム大聖堂において観光客向けにオルガンCDの販売を行っていた。このように、信徒ではない人にとって礼拝性が高く遠い存在であった宗教音楽をより近づけたのは、まさしく複製技術であるように感じる。

そして、そのような複製技術の普及は、「礼拝」のための音楽という要素を薄め、「展示」のための音楽という要素を色濃くしたように思われる。

さらに、「大量に生産でき、気軽に人々が求め得る」という複製技術の威力は、その発展に伴い、本来のあるべき姿、それだけがもつ崇高さを破壊してしまっただろうか。複製技術は私たちの潜在的な意識を大きく変えるほどの権力を保持していたのだ。

そして、複製技術が発展する以前と以後を比較するならば「礼拝価値」と「展示価値」は確実に変遷を遂げてきているように思われる。

現代では、時代の変化や技術的進歩に伴い「礼拝価値」が占める割合と同等に、もしくはそれ以上に「展示価値」が大きな割合を占めつつある。しかし、今回の調査において、真のパイプオルガンの音色や教会でしか味わえない音の響きや雰囲気などを体感し、「礼拝」をもとに発展してきた宗教音楽が持つ、独自の「礼拝価値」が完全に失われてしまったというわけではないことを強く感じた。また、「展示価値」が高くなったことで、宗教音楽の「礼拝価値」が低くなったことは、言い換えれば、宗教音楽が幅広い人々に親しまれやすくなったというように捉えることも可能であると思う。

「礼拝価値」から「展示価値」の変遷は、時代の推移から考えると当然の事象であったのかもしれないし、本来あるべき姿ではないにしろ、「礼拝価値」から「展示価値」の推移が一概に悪いことであるとは言えないだろう。それ以上に私がこの研究旅行における調査で感じ取らなければならないこと、それは「礼拝価値」から「展示価値」の推移の善悪の問題ではなく、それをもたらした「複製技術」の持っている真の力やそれがもたらした結果を感じ、さらに今後の研究に繋げることであると思う。

テキストだけでは理解困難な経験をパリという地で共有できたことは、今後の演習においての理解力を高めることを可能にすると言えるだろう。

最後に、このような貴重な経験をさせていただく機会を与えてくださった国際文化学部の先生方、関係者の皆様にこの場を借りて感謝の意を申し上げます。

本当にありがとうございました。

(4077字)

<参考文献>

「パイプオルガン 歴史とメカニズム」 秋元道雄／ショパン

「キリスト教と音楽 ヨーロッパ音楽の起源を訪ねて」 金澤正剛／音楽之友

「大聖堂物語 ゴシック建築と美術」 佐藤達生・木俣元一／河出書房新社

「パリ名建築でめぐる旅」 中島智章／河出書房新社